

ドイツにおけるイスラム学

安藤 志朗

Qur'anのラテン語訳がアンダルシアの地でなされたのが1143年, Ibn 'Arabshāhの'*Ajā'ib al-maqdūr*を以って初めてアラブ語刊本が現れたのが, オランダにて1636年のこと, そしてドイツでは Johann Jakob Reiske(1715-1776)の出現により漸くイスラム学発展の基礎が築かれた。ドイツのイスラム学は従って約200年程度の歴史である。しかし, それを通じて見たヨーロッパのイスラム学は, 私にとってやはり大きく, そして深かった。

私は1987年5月29日, 一抹の不安もなく, ただ快い緊張感のみをもってドイツへ飛び込み, 1992年3月18日, 規定を60kg上回る80kgの荷物を抱えて帰国した。ドイツ西南部の都市 Freiburg に到着し, 小雨の中をとぼとぼと歩いたのが5月31日のことで, それ以後の4年と10カ月, 激動の世界におろおろしつつも, 彼の地の人々のお陰で, 学問上この上なき経験を積む事が出来た。私はこの欄において, 興奮と感激のみの毎日だった約5年間を整理し, 今後ドイツにてイスラム学の習得を望まれる方々に何なりかの道しるべを書き記しておきたいと思う。

私の留学は, Deutscher Akademischer Austauschdienst(ドイツ学術交流会, 通称 DAAD)によって援助された。奨学金は一年毎に認可され, 日本人の場合は原則として一回の延長, すなわち計2年の滞独が限度である。その為, 研究目的は遂行可能な範囲で明確に定め, DAAD に通知せねばならない。私の場合は, 極めて珍しい専攻であった事と, 指導教官 Hans Robert Roemer 氏のお力添えで4回もの延長がなかった。しかし, もちろん延長は毎年保証されているわけではなかったので, 長期的な計画をたてることは難しかった。尚, ドイツ語の能力については, 私は採用試験の段階で Goethe Institut の中級が一番上のクラスにいて, さらに数カ月個人レッスンを受けていたが, 現地の大学で行われたドイツ語試験には2回も落第し, 2回目の時は Roemer 氏に「またか」と叱られてしまった。学術上の表現はドイツ人にとっても特殊で, 私は Roemer 氏に指導を仰がねばならなかった(もっとも他のドイツ人の話では, 氏のドイツ語は200年前のものらしい)。

ゼミでの討論などは、ある程度ドイツ語能力が備わったら、あとは度胸と場慣れだと思う。それでも最低2年は必要と思う。

ドイツの研究者養成のカリキュラムは、主専攻一つ、副専攻二つの3専攻制をとる。学生は入学当初、文系とか理系とかの区別なく自由に三つの専攻を組合せ、厳しい授業と必須の単位数に臨む。Freiburgのイスラム学は二つの専攻からなっている。アラブ語は必須で(主専攻にするか、副専攻にするかは自由)、ペルシャ語・トルコ語から一専攻とることができる。日本人がドイツでイスラム学を主専攻にして、正規の学生として在籍する際には、この3専攻制はかなり大きな壁になる。二つの専攻はイスラム学の中から選択出来ても、残りの一つが簡単に決まらないからである。従って、その三つ目の専攻をドイツで始め、かつイスラム学で例えば修士号を得ようとする、最低5、6年はかかると見たほうがよい。また、留学前にイスラム3言語の基礎知識は徹底的に習得しておいて然るべきと思う。場合によっては、その習得が認められ、以下に述べる語学試験も免除され、自分の研究に専念できる可能性もでてくる。尚、2年程度の短期留学の場合は、上記の規定は適用されず、イスラム学のみ専攻できる。

学生は入学して約2年後に基礎知識の習得を証明するため中間試験(Zwischenprüfung)を受け、あわせて言語の小試験に合格せねばならない。2度落第すると、ドイツ国内でイスラム学を専攻することはもはやできない。中間試験に合格してはじめて演習(Hauptseminar)に参加できる。卒論はなく、修論で以って大部分の学生は大学を修了する。修論を書く資格をとるためには、所定の単位をとり、かつ言語の大試験に合格せねばならない。これは、イスラム3言語の古典語と現代語の訳出である。こう書くと学生らの読解能力が卓越しているように思われるが、ゼミに実際に出てみると、正確に訳出できる学生は稀であった。彼らの間では、読むよりも話す方に力をいれる「実戦志向」の方が、「文献志向派」よりはるかに多い。

修論は入学後約7、8年で完成する。博士論文(Dissertation)は、修論後約3-5年で書き上げるようであるが、年数制限はない。博士号取得の可否はDissertationと3専攻の口頭試験Rigorosumの結果で決まる。認可されたDissertationは出版が義務づけられる。

ドイツのカリキュラムの特徴としてHabilitation(大学教授資格論文)の制度を挙げることができる。これは博士号取得後5年くらいの内に書くようである。あるアメリカの研究者は私に「ドイツでは2回博士論文を書かねばならない」と言ってドイツのカリキュラムの厳しさを指摘したが、まさにそのとおりである。大学の教授になるのに2冊の本

(Dissertation, Habilitation)を出版せねばならないのである。

次に目の届いた範囲内で現在のドイツのイスラム学の陣容にふれてみたい。私の在籍した Freiburg には1920年代には、イスラム法学研究の祖 Joseph Schacht がいた。現在のイスラム学科を含む Orientalisches Seminar は1964年 Mainz から移ってきた Roemer 氏(1964-1983)の尽力による。Roemer 氏の後任が Werner Ende 氏で、近世史及びシリア研究を専門とする。アラブ学近世以前を担当するのはマムルーク朝史の研究で知られる Ulrich Haarmann 氏である。私は氏のもとでアラブ学の Rigorosum を受けたが、アラブ語テキスト訳出の後に続いたアラブ史料学、ワクフ等に関する「応用問題」にはおおいに苦しむことになった。氏は研究の比重を以前のヒストリオグラフィーから社会経済史へと移しているようである。92年冬学期より Kiel へ転任される。イラン学は、1988年まで Erika Glassen 氏が担当していた。博士論文では初期サファヴィー朝を、Habilitation ではセルジューク朝期の宗教、思想史を扱った。女史の「メンタリティー研究」とでも称すべきものには独特の視点がある。現在イスタンブールの Orient-Institut でディレクターをされている。イラン学にはいま一人、才媛 Monika Gronke 氏がいる。フランス外務省の委任でパリでフランス人にペルシャ語を教えたという経歴からも窺えるように、卓越した言語能力を有す。文書研究に圧倒的な強みを持つドイツのイスラム学の中でも女史は一線級で、博士論文は周知の如く、ペルシャ語、アラブ語のアマルガムからなるアルダビール文書の一部を分析した。間もなく13,14世紀イランの社会経済史及びメンタリティーを扱った女史の Habilitation が出版の予定。私は女史のもとでイラン学、トルコ学の Rigorosum を受けた。15分間のオスマン語テキスト訳出の後、女史は残り45分間に60余の質問を私に浴びせた。91年冬学期より、30人の候補者をおしのけ Köln 大学のイスラム学科の教授に就任、Freiburg との間を行き来している。オスマン朝学 Osmanistik では、ハンガリー出身の Josef Matuz 氏が主にスレイマン時代の文書解読に力をいれていた。91年に退官。オスマン朝近世史には Urusinus 氏がいたが、間もなく Heidelberg へ転任の予定。92年よりオスマン朝近世史を専門とする Johan Strauß 氏が助手に着任した。Freiburg には他に、奴隷制の研究で知られ92年に退官した Hans Müller 氏、トルコ学の Wolfgang Scharlipp 氏がいる。

他大学では、まず Tübingen が特筆すべき存在。地方分立的なドイツでは各大学図書館が各々重点分野を定めて図書の購入にあたる。Tübingen は、東洋学を担当する。ネッカーの流れにたたずむ16世紀以来の建物の中にイスラム学、イラン学、東方キリスト教学、セム語学が入っている。イスラム学では思想史の大家 Joseph van Ess 氏がいる。

氏のライフワーク、*Theologie und Gesellschaft im 2. und 3. Jahrhundert Hidschra* は現在第2巻まで刊行した。Hainz Halm氏はシーア研究の専門家で、氏の *Die Schia* (Darmstadt 1988) はシーア派全セクトを包含する通史で、簡潔にして要点をえた名著である。アラブ語学には Manfred Ullmann がいる。イラン学は Heinz Gaube 氏が担当する。文献学と考古学の双方の手法を合わせ援用した氏の都市研究(本人談)は周知である。Tübingen はまた、TAVO の名称で知られる、11の学科による学際的プロジェクトを推進し、地理、植生、考古、歴史、経済等の観点から中近東地域の地図化が計られている。更に、最近285万マルクを費やして約3万個のイスラム圏からの貨幣が購入され、Tübingen はニューヨーク、ロンドンと並ぶヌミスマティクの中心地となった。

古くは楔形文字の解読者 Grotefend を擁した Göttingen も看過できない。アラブ学科は1960年の設立。Albert Dietrich の後、現在、初期イスラムの政治史、思想史の専門家 Tilman Nagel 氏がこの学科を代表する。イラン学は1976年以来 Altiranistik と Neuiranistik とに分かれている。前者は David Neil MacKenzie 氏が、後者は Gottfried Herrmann 氏が担当する。Herrmann 氏は前出のアルダビール文書群の発見者で、氏はこの文書を扱った Habilitation を計画したが、その中の2、3の文字が解読できなかったために諦めたという完全主義者である。文書及びインシャー作品研究の第一人者である。Göttingen はドイツにおけるイスラム期イランの研究の発祥の地とみなすこともできる。Walther Hinz(1906-1992)とその弟子 Bertold Spuler(1911-1990)、Hans Robert Roemer の三人は、戦後 Göttingen に集った。現在のドイツのほとんど全てのイラン研究者がこれら三人の内の誰かの弟子である。Omeljan Pritsak 氏も彼らとほぼ同時期、Göttingen にて Barthold を手本に研究に没頭したという話を、私は Roemer 氏から2度聞かされ、Pritsak 氏本人にも確かめた。Göttingen には更に、トルコ学と中央アジア学の講座 Turkologie und Zentralasienkunde がある。ここには、日本でもつとに知られている Gerhard Doerfer 氏が1970年より在職していたが、92年度夏学期からは後任として、Klaus Michael Röhrborn 氏が着任した。Röhrborn 氏は博士論文ではサファヴィー朝を、Habilitation ではオスマン朝をテーマにし、現在は主に古代ウイグル文献を扱っている。

Hamburg 大学では Seminar für Geschichte und Kultur des Vorderen Orients でイスラム学が学ばれる。Spuler の後任は初期イスラム史を専門とする Albrecht Noth 氏である。Köln 大学は、Abdoldjavad Falaturi 氏のもとでシーア文庫3,500巻を核とするシーア研究が重点的になされていた。氏の退任後、前出の Gronke 氏が着任し、神学的研究から歴史研究へと傾向を変えつつある。Frankfurt 大学では Rudolf Sellheim 氏がア

ラブ学を受け持つ。また、Berta氏のもとではアルタイ学が扱われている。1987年開設の Bamberg のアラブ学には神学、文学専門の Rotrand Wielandt 女史が、イラン学にはオーストリア出身の Bert Fragner 氏が、トルコ学には Klaus Kreiser 氏がいる。その他、Bochum, Münster, Gießen, Mainz, Berlin, Erlangen 等が、各自の特色を出しつつイスラム諸分野を扱っている。更に、地理学 Geographie, 民族学 Volkskunde, 政治学 Politik 等の学科でもイスラム圏を研究の対象とするから、ドイツ国内のイスラム研究はかなりの多様性と層の厚さを持つと推定される。

ドイツのイスラム学の特徴は、辞書編纂学、文献学、神学、哲学の4分野にある。これは、私を含めたドイツ人以外の研究者のみならず、ドイツ人研究者自身も認める顕著な傾向である。その意味で、Tübingen はドイツ・イスラム学の特徴を最も如実に示している。イラン学に限って言えば、Hinz 以後の研究傾向は事件史から制度史へ、そして社会経済史、メンタリティー研究へと推移している。文書とインシャー文学の研究に裏付けられた制度史、社会経済史は、ドイツのイラン学の最も得意とする分野の一つである。このことは、オスマン朝研究やアラブ学の分野にもある程度あてはまり、修士論文で原文書を扱うのもごく普通のことである。

ドイツの、あるいはヨーロッパのイスラム研究が日本のそれに対して持つ最大の長所と思われる点は、当然のことながら、イスラム圏との、そして研究者間の交流の容易さと活発さであろう。学生も休暇を利用して頻繁に現地へ行く。中間試験に合格した者なら、DAAD の援助で現地で勉学を遂行したり、修論の準備をすることができる。イスラム圏からの学生も多数ドイツで勉強しているし、ネイティブ・スピーカーのイスラム研究者も講師として指導にあたるから、言葉の習得に不便はない。ドイツは更に、イスタンブルとベイルートに Orient-Institut を、またテヘラン、バグダード、カイロ、イスタンブル、アテネ、マドリッドには Deutsches Archäologisches Institut を有し、イスラム圏との共同作業を推進する。若い研究者は、助手としてこれら諸機関に採用され、現地で研究することができる。ヨーロッパ内でも、ドイツからロンドンやパリの研究施設への移動や、その利用は、東京・京都間の移動程度の気軽さだし、同時にその地で多様な研究に容易に接することができる。各地を巡りつつ研究遍歴を繰り返す習慣は、今も昔もドイツでは重要性をもつ。一つの国で一つの大学に留まって同窓会をもつことはない。ヨーロッパの学会には、そもそも国内とか国外とかの区別はない。大抵のドイツ人研究者は、英・仏語でも、公の場で堂々と意見を述べる。

彼の地のあり方を見て、日本の次世代の研究についてまず思うのは、やはりイスラム圏

での研究施設の制度化とその充実,それに基づく交流の更なる緊密化である。個々の若い研究者も,言葉の壁をものともせず自分の意見を海外研究者にぶつけるべきだとおもう。外国の研究者の意見を日本語で批判したり,日本の研究を内輪で自画自賛している時代ではなくなっている。

最後にドイツのイスラム学の動向を知るための手引書のいくつかを挙げておく。詳細は,各大学に問い合わせられたい。

Bär, Erika. *Bibliographie zur deutschsprachigen Islamwissenschaft und Semitistik vom Anfang des 19. Jahrhunderts bis heute*. Wiesbaden 1985(Bd 1), 1991(Bd 2).

Schwarz, Klaus. *Der Vordere Orient in den Hochschulschriften Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. Eine Bibliographie von Dissertationen und Habilitationsschrift (1885-1978)*. Freiburg i. Br. 1980.

Societas Iranologica Europaea(ed). *Guide to Iranian Studies in Europe. part one. Institutions and Teaching Programmes in twelve countries of Western Europe*. Leiden 1988.